NK 高级日语系列教材

日本文化概论

韩立红 编著

:G131

南開大学出版社

高级日语系列教材

日本文化概论

韩立红　编著

南开大学出版社
天　津

图书在版编目(CIP)数据

日本文化概论/韩立红编著. -天津:南开大学出版社,2003.12
(高级日语系列教材)
ISBN 7-310-01989-X

Ⅰ.日… Ⅱ.韩… Ⅲ.日语—语言读物
Ⅳ.H369.4

中国版本图书馆CIP数据核字(2003)第082606号

出版发行 南开大学出版社
地址:天津市南开区卫津路94号 邮编:300071
营销部电话:022-23508339 23500755
营销部传真:022-23508542
邮购部电话:022-23502200
出版人 肖占鹏
承 印 天津市蓟县宏图印务有限公司印刷
经 销 全国各地新华书店
版 次 2003年12月第1版
印 次 2003年12月第1次印刷
开 本 880mm×1230mm 1/32
印 张 8.875
插 页 2千字
字 数 246千字
印 数 1—3000
定 价 16.00元

前　言

我国大学的日语教学界自 20 世纪 80 年代末逐步开始了与国际日本语言文化教学模式接轨的变革，其重要内容之一是在日语语言文学专业本科生的教学课程体系中加大日本社会文化课程的力度，在研究生培养中增设日本文化研究方向，旨在拓宽学科领域，培养适应 21 世纪社会发展需要的“复合型”、通用型人才和高素质的创新型人才。然而我国重点高等院校中的日本文化教学和研究虽然取得了有史以来的最大发展，但是关于日本文化课程的教材建设却明显滞后，迄今为止国内还没有一本以日语写作的点面有机结合的《日本文化概论》教材。

据我所知，我国现已出版的有关日本文化的部分教材，大多是讲述日本的衣、食、住、行等生活文化以及日本的茶道、花道、歌舞伎等方面内容的，这些基本知识对于日语语言文学专业的教学无疑是不可或缺的，但如果仅停留在介绍这些日本文化的表象，则不能使学生综合而深入地了解和把握日本文化的精髓及其特质。韩立红博士用日语编著的这部《日本文化概论》教材，正好解决了这一问题，具有添补空白的意义，今将出版，实为可喜可贺。

《日本文化概论》这部教材是韩立红博士结合自己多年的研究和文化课教学实践，花费了四年时间编著的。我作为第一个读者，读后受益良多。它不仅在体例方面有诸多创新，而且在内容论述方面颇见深度。作者从日本的精神文化入手，从日本文化的基本特征——开放性开始，到生产方式的稻作文化特征、基于“家制度”的纵向型社会结构和重实用的文化心理结构特征，以及天皇崇拜的历史根源等，层次分明地展开论述，不仅论及日本的哲学、宗教、文学艺术、教育、风俗、技术、科学等几乎所有的文化领域，而且提纲挈领地概括了日本文化的特质。同时，该著作对有关“日本文化论”及“日本人论”

的日本学者及外国学者的重要学术观点也进行了分析评述，诸如中根千枝的纵向社会的人际关系理论、土居健郎的“依赖心理结构”理论、本尼迪克特的“耻感文化”论等日本文化研究领域具有代表性的学术观点，均在本书中有所论述。

多年来我一直思考一个问题：同为人文学科，为什么外语学科出身的人既容易出季羡林先生那样学贯东西的大师，而一般外语学科学生的综合人文理论水平和问题意识与文史哲出身的学生相比却又有一定的差距。近年来对这一问题似乎想明白了些。即是说，对于外语学习者来说，学习一门外语就意味着要掌握母语以外的另一种语言所构筑的一整套文化传统，“获得一种新的对世界的看法”，因此它比其他文科学生多了一种文化参照系，有利于其人文思维的发展；但是另方面，外语学科的学生进入大学后必须将大量时间用于练“外语功”，且其方法多以“模仿”为主，久而久之就会形成一种“趋同思维定势”，这无疑又不利于其人文思维的发展和思辨能力的培育。因此我们外语学科的学生要增强人文素质和思辨能力，就必须加强文化课的教学，并在教学中特别注重对对象国精神文化的特质及其形成原因和逻辑的探究和分析。韩立红博士的这部《日本文化概论》，就是以考察论析日本精神文化的特质为主线展开的，其目的是以此激发学生对日本的思想、宗教、历史、政治等人文问题的关心和研究欲望，激励学生对其与本国文化关系的思考和学术兴趣，这对于培养新一代日本问题研究者所必要的较强思辨能力和创新意识，无疑大有裨益。

为了扩展学生的知识面和增强其对日本文化事象的解析能力，该书还穿插了“关联知识”，并将具体的文化现象与其特质相结合展开论析，做到了既涵盖面宽，又理论联系实际，既突出了重点又照顾到了相关的“面”。特别是其“以点带面”的著述方法，较好处理了“点与面”、“深度与广度”的关系。例如，作者在论述日本文化的基本特征——开放性和主动性时，不但论析了日本文化形成和发展进程中的“开放性”和“主动性”特点，还以点带面，将日本历史进程中几次大规

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

模吸收外部文化的史实和内容，以及体现在现代日本文化中的外来文化和日本固有文化的变异内容一并编在书中，以利学生不是空洞地增强理性认识，而是“有血有肉”地认知和把握日本文化的性质和特征。

我相信，本书的出版必将为中国日语语言文学学科的文化课程的建设以及日本文化研究者的培养作出有益的贡献。

刘 金 才

2003 年盛夏，于北大蓝旗营书斋

前書き

文化とは何か。日本文化の基本的な特徴は何であろうか。

中国の古代においては、「文化」は、「文治と教化」の意味として理解され、また、礼楽典章制度を指している。西漢時代の思想家劉向が「説苑」の中で“聖人之治天下也、先文徳而後武力。凡武之興，為不服也；文化不改，然後加誅。夫下愚不移，純徳之所不能化，而後武力加焉”と定義している。ここで指す「文化」は、支配者がまず文徳（詩書、礼楽など）で被支配者たちを教育し、その愚かさを教化するようにし、どうにもできない場合に武力で治めるという意味である。だから、中国伝統意味での“文化”は“徳で教化する”或いは“文で相化する”或いは礼樂典章制度というように解釈できる。

世界文化研究史において、Culture と Civilization という言葉についての論争が行われたことがあった。中国語に訳せば、前者は文化で、後者は文明と訳せる。フランス、イギリス、アメリカなどの社会学者は文化を言う場合には、常に Civilization を使うが、ドイツの歴史哲学者たちは、常に Culture という言葉を使う。これは意味のない論争のようだが、実は欧米文化研究における二つの対立的な伝統を現していると思う。つまり、実証的社会学伝統と思弁的歴史哲学伝統の対立、イギリス、アメリカ伝統とドイツ伝統の対立でもあるだろう。イギリス、アメリカ伝統の文化研究者は、文化を既定事実の各形態の総和（そうわ）と見なしている。つまり、文化を人類が創造した物質及び精神成果の総和としているが、ドイツ伝統の文化研究者は、文化を生命或いは生きているものとし

ての生活の様態を取り扱っている。ドイツ伝統の文化研究者から見ると、文化の形態化、制度化、モデル化が文化の死を意味している。だから、「文化は生きている文明で、文明は死んだ文化である。」という言葉さえ出てきた。

実際、文化は人類が自然の基礎の上で、社会活動の中で創造し、保存した内容の総和として、また生きている創造活動として進展変化しているものである。

一般的に言うと、文化は、人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果で、衣食住をはじめ技術、学問、芸術、道徳、宗教、政治など生活形式の様式と内容を含んでいる。文化は、文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では文明と区別して使っていることが多い。

もちろん、文化は統一された体系として、複雑な内容が含まれていて、哲学、宗教、科学、技術、文学、芸術、教育、風俗など多方面の内容が含まれている。それを詳しく分けると、三つに分けられる。第一は、核心的な「心」の部分として、思想、意識、観念などで、思想意識はまた価値観念と思惟方式とに分けることができる。第二は、「物心」両面に関わっている分野で、制度、風俗として、思想観点などによって形成された条例、規則などである。第三は、「物」の分野として、文化を現している全ての実物、つまり人類が生産活動の中で創造してきた物質文化を指している。これらは、人類と自然の関係、人と人との間の人間関係、人間自身の関係（霊と肉、精神生活と物質生活など）という三つの面においての関係を表したが、科学、技術、政治、法律、文学、芸術、哲学、宗教などがこれに属しており、哲学と宗教がその中でも核心の部分に属している。

では、日本文化の基本的な特性は何であろう。

簡単にまとめて言うと、日本文化の一番大きな特徴はその開放性にあるといえるだろう。

中国文化が原生的、創造的な文化であると考える場合、日本文化は継発的、摂取的な文化であるといえる。日本は古くから世界の先進的な外来文化の摂取を通して、自国の文化を発展させてきた。日本文化の自然な発展進化は、その形成過程において、弥生時代に至って自分よりはるかに先進的な外来文明の浸透(しんとう)によって中断させられた。弥生時代においてすでに、日本文化は自分よりはるかに先進的な外来文化に対して抵抗なく、次々と取り入れ、外来文化を摂取する過程で開放性という特徴を備えるようになった。この開放性によって、日本は中国文化、朝鮮文化、インド文化、南蛮（ポルトガルを主として）文化、紅毛（オランダを主として）文化、西欧文化、アメリカ文化などを自国の文化に取り入れた。なかでも、大化改新前後における中国隋唐文化の摂取、明治維新時期における西欧文化の摂取、第二次世界大戦後のアメリカ文化の摂取が、日本の外来文化摂取史においての三大画期である。

しかし、日本文化は単に外来先進文化を摂取する開放性を持つだけではなく、自国に取り入れた文化を消化し、改造し、日本化する主体性を同時に有している。日本は、当時世界において最も進んだ先進文化だけを吸収した。日本の外来文化の摂取は単純な模倣ではなく、現実的な必要とその可能性を考慮した上で外来文化を選択し学ぶようにした。そして、「鎌倉新仏教」、「江戸時代の儒学」というような日本的なものが現れるようになった。これは、日本文化が、また主体性という特質を持っていることを現している。

目　次

前言

前書き

第一章　日本文化の基本的な特徴—開放性と主体性 / 1

一、日本文化の開放性と主体性 / 1

二、基本的特徴の形成要因 / 7

三、大化改新と隋唐文化の吸収 / 10

四、明治維新と西洋文化の吸収 / 15

五、敗戦とアメリカ文化の吸収 / 21

関連知識一 / 28

第二章　稲作文化の特質 / 33

一、稲作文化の上陸 / 33

二、稲作文化の影響　/ 35

関連知識二 / 46

第三章　「家」を基盤とする「タテ」の社会構造 / 66

一、「タテ」の社会構造 / 66

二、日本の「家」制度 / 71

三、中日の「家」制度の比較 / 74

関連知識三 / 79

第四章　実用を重んじる文化心理 / 100
一、日本人の「即物主義」的な性格 / 100
二、日本人の実用主義的な宗教観 / 106
三、中国の儒学の吸収 / 112
四、日本の儒学 / 117
関連知識四 / 125

第五章　日本人の「無常」観 / 144
一、「無常」と日本文学 / 144
二、「無常」と日本人の危機感 / 149
三、「無常」と日本人の死生観 / 152
関連知識五 / 156

第六章　天皇崇拝の伝統 / 161
一、天孫降臨と国体思想 / 161
二、天皇崇拝と儒教の「忠孝」思想との結合 / 166
三、象徴天皇への変貌 / 168
関連知識六 / 170

第七章　日本人の「甘え」 / 175
一、「甘え」の文化心理 / 176
二、「甘え」の人間関係 / 179
三、「甘え」の社会体制 / 182
四、まとめ / 184
関連知識七 / 187

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第八章　「恥」と「義理人情」 / 193
一、日本人の「恥」 / 193
二、義理人情 / 197
関連知識八 / 202

第九章　日本人の「道」思想 / 209
一、武士道 / 212
二、茶道 / 216
三、華道 / 221
四、書道 / 226

第十章　外国人による日本人論の名著 / 229
一、戴季陶『日本論』 / 229
二、周作人「日本管窺」 / 234
三、R・ベネディクト『菊と刀』 / 239
四、E・O・ライシャワー『ザ.ジャパニーズ』 / 244
五、李御寧『「縮」志向の日本人』 / 249

日本文化史年表 / 255
参考文献 / 262
后記 / 266

第一章　日本文化の基本的な特徴－開放性と主体性[1]

一、日本文化の開放性と主体性

中国文化が原生的、創造的な文化であると考える場合、日本文化は継発的、摂取的な文化であるといえる。継発的、摂取的な特性が日本文化に開放性と主体性をもたらした。

周知の通り、東アジア文明圏或は「儒教」文明圏、西洋のキリスト教文明圏、西アジア—中東のイスラム文明圏と南アジア仏教—インド教文明圏とが世界四大文明圏と呼ばれている。その中で、歴史が悠久で、範囲が広大で、成果が輝かしく、影響の深い東アジア文明圏の核—「儒教」から観察してみると、この文明が中国から発し、中国で形成されたことが分かる。中国は、東アジアの伝統文明の軸心として、その周囲の国々に対し影響を与えてきた。

中国文明は、漢民族を主体とする中華民族が長い人類歴史の発展の中で東アジア大陸という土地の上で、大自然と戦いながら形成してきた文化である。中華文明は、独立的に自主的に独特の伝統文化を創り出し、何千年間の発展を経て春秋戦国時代—所謂中国文明の

---

[1] この章の内容は主に武安隆氏の『文化の決択と発展』という著書を参考としている。

「軸心時代」一に至ってその基本的な形ができるようになり、秦と漢を経て最終的に定着した。以後、宋代と明代の時期に至って変動があったが、従来の範囲から抜け出せなかった。この文明が自主的に独立的に形成したから、「原生性」、或は「創造性」の文明とも呼ばれている。このような文明が形成して定着してしまうと、強大な生命力を示し、周囲の異なっている古代文化、或は異なっている文明圏の文化と交流し、対峙し、衝突が起こる時強力な主導性と自主性を発揮することができる。中華文明のこういう特性についてイギリスの有名な学者ジョセフ．ニーダムが次のように述べたことがあった。中国と西方の隣国との往来と融合は想像より多かったが、中国の思想と文化の基調的なものが顕著には中断されずに、自発性を保ってきた。

中国文明の自立的な特徴はその原生性に表れているだけではなく、また相対的な「単一性」にも表れている。古代から近代まで中国の伝統文明が、定着して以来、数多くの多民族間との戦乱を経て来た。また、世界において勢力の大きい、異なる宗教文明や各文化要素と出会い、さまざまな衝突が発生してきたが、中華文明の主体と基本構成は、あまり変化することなく、継続的に発展してきた。文化の異なる他民族に侵入され、また、一時期支配されたことはあったが、中華文明の主体は変らなかった。かえって、侵入してきた少数民族の方が強大な中華文明に同化され、或はこの文明圏以外に排除される状態であった。レベルの同じような外来文明との衝突も大体同じであった。中国に対して大きな影響を与えた仏教が東漢の時期にインドから中国に伝来し、隋と唐に至って隆盛期に達した。支配階級の嗜好によって、仏教は一時期儒教と同じように重視され、また儒教よりもっと重視される時期もあったが、最終的にはやはり抑制され、中国伝統文化の一つの重要な構成部分とはいえ、儒教の付属物でしかなかった。また、イスラム教文化の場合、７世紀の中葉に中

国に伝来し、宋と元の時代以後発展を遂げ、明末清初の時期にイスラム教の学者が現われ、イスラム教教育も盛んに行われ大きな発展を遂げた。その範囲は、中国の広い地域に影響を与えていたが、中国文化の核心である儒教とは対抗できない存在であり、中華民族の主体—漢民族文化にも大きな影響を及ぶことができなかった。結局、イスラム教の存在は儒教に対して脅威が感じられない状況のもとに、その存在が可能であった。儒教文化と差異の大きいキリスト教も中国の唐の時代に伝来したが、大きな影響を及ぼすことはなかった。キリスト教は、元、明、清の時代、幾度も中国で宣教運動を行なったが、幾度も中断された。以上から中国文化の同化力と排除力は驚くほど強いものであることが分かる。これは、中国文明の原生性と継続性を示している。

中国文明の原生性と継続性という特性と比べて見ると、日本の伝統文化は、開放性と周辺性が特徴となっていることが分かる。日本は古くから周辺文明として、長期にわたって孤立的に発展してきた。古代の日本は、アジアの東に位置している孤島として、独自的に自分の文化を発展させてきた。「日本農業文明の発生はヨーロッパ、中東、インド、中国より何千年も後れている。」[①]外来文明がなかったとすれば、日本文明の発展は、また違う状況であっただろう。紀元前三世紀前まで、日本列島では土着文化の縄文文化が8000年ほど続き、原始の採集文化と旧石器時代の文化であった。しかし、「日本列島に閉じ込められた私達の祖先が長い間、石器文化の段階で足踏みしている間に、大陸の漢民族は早くも金属文化の時代を迎え、強大な国家を作っていた。」「漢民族の四周への発展はめざましく、その余勢は我が日本列島にも及んで、日本に金属文化と農耕技術をもたらすこと

---

① E. O. ライシャワー著、『ザ. ジャパニーズ』、上海訳文出版社、42ページ、1980年。日本版、1977年。

となった」[①]、大陸の稲作文化圏の民族が金属器を携えて日本列島に上陸してから、日本は急に原始の採集文化から水田農耕段階に入り、旧石器時代から急に鉄器と青銅器の併用時代に入り、輝かし弥生文化が現れるようになった。縄文文化と弥生文化の「混血」によって日本民族が形成された。日本文化の自然的な発展（進化）は、その緩慢な形成過程において、弥生時代に至って自分よりはるかに先進的な大陸の外来文明の浸透によって中断させられた。日本の縄文文化と大陸文明との落差によって、日本は大陸からの外来先進文明に対して、垂直型の姿勢で自分よりはるかに先進的な外来文化に対して抵抗なく、次々と取り入れるようになった。そして、外来文化の吸収によって、日本列島では飛躍的な変化が起き、日本は、外来文化を摂取する過程で開放性という特徴を備えるようになった。日本文化の開放性によって、日本は中国文化、朝鮮文化、インド文化、南蛮（ポルトガルを主として）文化、紅毛（オランダを主として）文化、西欧文化、アメリカ文化などを自国に取り入れた。なかでも、645年、大化改新前後における中国隋唐文化の摂取、1868年、明治維新時期における西欧文化の摂取、第二次世界大戦後のアメリカ文化の摂取が、日本の外来文化摂取史においての三大画期である。

しかし、日本文化は単に外来先進文化を摂取する開放性をもつだけではなく、自国に取り入れた外来文化を消化し、改造し、日本化する主体性を同時に有している。日本の外来文化の摂取は単純な模倣ではなく、現実的な必要とその可能性を考慮した上で外来文化を選択し学ぶようにした。だから、日本文化は、また主体性という特質も持っていると言える。

日本文化の主体性としては、まず、外来文化を吸収する際の主導性を挙げることができる。外来文化を吸収する過程で、日本は当時の

---

① 家永三郎著、『日本文化史』、岩波新書、1978年、17ページ。

世界において最も先進的な文化だけを吸収した。紀元５－６世紀頃、中国は古代アジアにおける文明の中心地のみならず、世界の文明の中心地でもあった。日本は、中国の隋唐の先進的な生産方式と政治制度を移植した。紀元 18－19 世紀ヨーロッパは世界近代資本主義の発生地として、近代文明の中心地であった。日本は、ヨーロッパより近代学術と近代思想を輸入し、近代産業と経済制度を移植した。第二次世界大戦後、アメリカは、世界現代文明のモデルとして、世界各国の憧れの国となり、日本も大幅なスピードでアメリカの議会民主主義制度と管理科学を取り入れ、アメリカの生活様式を普及させた。

日本文化の主体性のもう一つは、吸収過程での選択性が挙げられる。日本はいつも世界において最も先進的な文化を吸収してきた。しかも、自国に有益な文化、自国に適応できる文化だけを吸収してきた。古代において中国文化に対する吸収過程で、日本は、中国の隋唐の先進生産方式と政治制度を移植したが、日本人に受け入れ難い科挙制と宦官制を拒否した。中国の科挙制は、人材の選抜によかったが、日本固有の身分制と世襲制に適用できなかったので、日本は科挙制の輸入吸収を放棄した。

日本文化の主体性の三つ目は、その融合性が挙げられる。外来文化を吸収する中で、日本は機械的にそのまま外来文化を吸収しただけではなく、強い融合性を示した。日本は、外来の文化に対し改造と融合とを行なった上でそれを日本化した。日本は、漢字の改造を通して、日本の文字を作った。つまり、漢字の草書を基礎として平仮名を作り、楷書を基礎としてカタカナを作った。また、大陸から伝来してきた仏教に対し改造を行い、日本の固有思想を中に取り入れ、「現世仏教」を作った。また、中国から儒学思想を取り入れたが、本来は「仁」を中心とした儒学の思想を、「忠」を中心とした日本儒学に変え、天皇制に利用した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com